

当科における降下性壊死性縦隔炎8例

宇和伸浩 寺田友紀 毛利武士 阪上雅史

兵庫医科大学 耳鼻咽喉科

【はじめに】降下性壊死性縦隔炎は深頸部膿瘍が縦隔にまで進展する重篤な感染症である。致死率は高く、耳鼻咽喉科医にとって他科との密な連携のもと早急で適切な治療を行なうことが重要である。

【対 象】今回我々は2005年から2010年の間に当院で治療を行った降下性壊死性縦隔炎8例（男性4例、女性4例、平均年齢59.8歳）について検討し、文献的考察を加えて報告する。

【結 果】8例中、基礎疾患として3例で糖尿病を合併していたが、他の5例では易感染性となりうる基礎疾患を認めなかった。原因としては急性扁桃炎が3例、齲歯が2例、急性喉頭炎が1例、急性咽頭炎が1例、急性耳下腺炎が1例であった。初診時、膿瘍の進展範囲は1例で前縦隔上方まで、3例で前縦隔下方まで、4例で後縦隔にまで及んでいた。初回治療時に頸部よりのドレナージのみを行ったのは8例中4例であったが、これらの症例ではいずれも初回治療後に感染の拡大を認め、開胸縦隔ドレナージを要した。経過中5例にメチシリン耐性黄色ブドウ球菌（MRSA）感染を認めた。集中治療室での管理期間は12～54日（平均31日）、入院期間は33～163日（平均86日）と長期に及んだ。経過中MRSA感染を合併し多臓器不全に陥った1例を除き、7例（87.5%）で幸いにも救命できた。

【考 察】降下性壊死性縦隔炎に対しては早期の外科的治療が重要で、初回治療時より呼吸器外科との連携のもと、頸部と胸部両方からのアプローチで外科的ドレナージを行うのが良いと考えられた。また、救命のためには全身管理とともに耐性菌への対応も重要である。